

介護福祉士が展開する卓越した実践の特徴 — A県介護福祉士会を対象とした自由記述回答の質的分析を通して —

口村 淳 岡山県立大学 保健福祉学部

〔共同著者〕北村 健宏 市立長浜病院 療養2階病棟・高田 栄亮 社会福祉法人慈恵会 特別養護老人ホームゆいの里

キーワード 求められる介護福祉士像、卓越した実践、質的記述的研究、根拠に基づいた実践、問題解決

I | 研究の背景と目的

2017年に厚生労働省の福祉人材確保専門委員会にて、10年ぶりに「求められる介護福祉士像」の内容の見直しが行われた。見直された「求められる介護福祉士像」は、行動指針となる10項目に「高い倫理性の保持」を加えた11項目から成る¹⁾。介護福祉士には現場のケア提供者の中で中核的な役割を果たすことが求められるとともに、認知症高齢者や高齢単身世帯等の増加といった社会状況の変化にともなう多様で複雑な介護ニーズに対応できることが、見直しの背景にある。伊藤(2018)は『「求められる介護福祉士像」』に示されている能力や態度には、その一つ一つに高さや広さ、深さがある。これらの能力や態度は資格取得後も、自己研鑽し磨いていく必要性がある」と述べている。「求められる介護福祉士像」で示された各項目を、それぞれの現場においてさらに掘り下げ、利用者の利益につながる実践を展開することが重要であると理解できる。裏を返せば、提示された内容に倣うだけでは、多様で複雑な介護ニーズに対応することは難しいといえよう。

介護現場において発生する諸問題に対し、

一般化されたマニュアルの通りでは、解決に至らないことがあるのも事実である。その一方で、現場で問題が発生した時に、ある介護福祉士の高度な実践に助けられることも少なくない。また、利用者や家族とも信頼関係(rapport)を構築し、他の職員とは一線を画す成果をあげる介護福祉士もみられる。こうした優れた実践(者)に接すると、自身の実践を省察する機会にもなり、実践者としての道標となり得る。本稿では、一般的な実践に比べ、より高度で望ましい実践を「卓越した実践」と呼ぶこととする。介護福祉士の卓越した実践を可視化することは、「求められる介護福祉士像」に示された内容を深化させ、さらに磨いていくためにも意義があると考えられる。

卓越した実践に関する先行研究として、近接領域である看護師を対象とした研究に目を向けると、別府(2019)の看護師長のコンピテンシーに関する研究、谷口ら(2017)の救急病棟でのせん妄発症予防に関する研究、齋藤(2015)の高齢者の退院調整に関する研究、また上田ら(2005)の病院に就業する看護師を対象とした研究など、分野ごとに一定の蓄積がなされていることがわかる。

一方、介護福祉士を対象とした先行研究では、専門性に関する研究(岩井2006;本間ら2010;大村ら2010;安2013)、5年以上勤続の中堅介護福祉士を対象とした研究(吉田ら2012;柗崎ら2018)、勤務年数による介護実践能力に関する研究(武田ら2018)、介護リーダーの役割認識に関する研究(高橋ら2020)といった専門性の構造や勤務年数と実践内容の関係、リーダーの役割に関する研究は蓄積されているものの、卓越した実践に特化した研究は、筆者の調べた限りはみられず、その点では検討の余地が残されている。そこで本研究では、介護福祉士が展開する卓越した実践の全体像を明らかにし、その特徴について検討したい。これにより、介護現場での現任研修や実践の指針を示すことに資するものと考えられる。

II | 研究方法

1. 研究デザイン

無記名自記式質問用紙による質的記述的研究である。

2. 調査対象者とデータ収集方法

調査対象者は、A県介護福祉士会の会員である。データ収集は次の2段階で行った。最初に、全会員(801人:2020年6月時点)に「調査依頼書」および「調査協力回答書」を郵送し、調査協力を募った。調査協力が可能な場合には、「調査協力回答書」をA県介護福祉士会事務局宛にファックスで返信してもらう方法をとった。次に、「調査協力回答書」が送られてきた会員(調査協力者)27人に対して、改めて「自記式質問用紙」を郵送した。返送用封筒を同封し、27人全員から回答が得られた。

3. 調査期間

2020年6月～10月

4. 「自記式質問用紙」の内容

「自記式質問用紙」は、調査協力者の属性を問う内容と、具体的な事例を自由記述する内容から構成されている。前者は、調査協力者の性別、年齢、経験年数、所属の4項目である。後者は、卓越した実践を展開する介護福祉士の存在を問う項目と、具体的な事例およびその属性について記述する項目から成る。調査協力者一人につき、最大3事例まで記述できるようにした。

5. 自由記述データの分析方法

「自記式質問用紙」における自由記述(事例)のデータ分析は、以下の手順で行った。

手順①:自由記述に記載された内容から、文脈ごとに一つのデータとして抽出した。

一つの事例の中に、複数の文脈が読み取れる場合は、それぞれを独立したデータとして抽出した。

手順②:抽出したデータに、その内容を適切に表現するコードをつけた。

手順③:各コードにおける意味内容をふまえ、グルーピングし、カテゴリを生成した。

手順④:カテゴリ間の関係や共通性を検討しながら、上位カテゴリを生成した。

手順⑤:上位カテゴリの対象に着目し、領域ごとに分類した。

手順⑥:上位カテゴリ間の関係性について図式化した。

なお、手順②から手順⑥の各過程で、第一筆者が作成した内容を基に、第二筆者および第三筆者を交えて討議を行い、データ分析の

信頼性・妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

「調査依頼書」には研究の主旨、調査協力は自由意志であること、回答は無記名とし、得られた回答は個人が特定されないようにデータ管理すること、ならびに研究目的に限定した調査結果の公表について明記し、「自記式質問用紙」の回答・返送をもって同意を得たものとした。

III 研究結果

1. 調査協力者の基本属性(表1)

性別は、男性が13人(48.1%)、女性が14人(51.9%)である。年齢は、40代が12人(44.4%)で最も多く、次いで30代が6人

表1 調査協力者の基本属性 n=27

項目			
性別	男性	13	48.1%
	女性	14	51.9%
年齢	20代	1	3.7%
	30代	6	22.2%
	40代	12	44.4%
	50代	4	14.8%
	60代以上	4	14.8%
経験年数	5～9年	4	14.8%
	10～14年	5	18.5%
	15～19年	9	33.3%
	20～24年	5	18.5%
	25年～	4	14.8%
所属	介護老人福祉施設	9	33.3%
	病院・診療所	9	33.3%
	訪問介護	1	3.7%
	通所介護	2	7.4%
	認知症対応型共同生活介護	1	3.7%
	小規模多機能型居宅介護	2	7.4%
	居宅介護支援事業所	1	3.7%
	福祉用具貸与・販売	1	3.7%
不明	1	3.7%	

(22.2%)、50代と60代以上が各4人(14.8%)、20代が1人(3.7%)と続いた。経験年数は、「15～19年」が9人(33.3%)で最も多く、次いで「10～14年」と「20～24年」が各5人(18.5%)、「5～9年」と「25年以上」が各4人(14.8%)となった。所属は、介護老人福祉施設と病院・診療所が各9人(33.3%)で最も多く、次いで通所介護と小規模多機能型居宅介護が各2人(7.4%)、訪問介護、認知症対応型共同生活介護、居宅介護支援事業所、福祉用具販売・貸与、不明がそれぞれ1人(3.7%)であった。

日本介護福祉士養成施設協会の統計²⁾によると、養成施設卒業生6,028人(2019年3月)の進路として、介護老人福祉施設が2,710人で全体の47.6%を占め、次いで介護老人保健施設(14.2%)、居宅サービス関連事業(9.6%)、自立支援施設(9.0%)、有料老人ホーム・福祉関連企業(6.2%)、医療機関(4.4%)と続いている。卒業生の進路と既勤務者の所属では厳密な比較は難しいものの、本調査では、医療機関(病院・診療所)が介護老人福祉施設と同数であり、一般的な介護福祉士の所属分布との違いがみられた。

2. 卓越した介護福祉士の実践に関する分析

調査協力者の中で、卓越した介護福祉士の実践について知覚した経験が「ある」と回答した者が25人、「ない」と回答した者が2人であった。そのため、「ある」と回答した25人から得られた56事例(平均2.2事例/1人)を分析対象とした。

事例の基本属性を表2に記す。性別は、男性が20人(35.7%)、女性が35人(62.5%)、不明が1人(1.8%)であった。年齢は、40代が最も多く21人(37.5%)、次いで30代が13人(23.2%)、20代、50代、60代以上が各6

表2 事例の基本属性

n = 56

項目			
性別	男性	20	35.7%
	女性	35	62.5%
	不明	1	1.8%
年齢	20代	6	10.7%
	30代	13	23.2%
	40代	21	37.5%
	50代	6	10.7%
	60代以上	6	10.7%
	不明	4	7.1%
経験年数	0～4年	5	8.9%
	5～9年	9	16.1%
	10～14年	11	19.6%
	15～19年	13	23.2%
	20～24年	11	19.6%
	25年～	3	5.4%
調査協力者との関係	不明	4	7.1%
	上司・先輩	14	25.0%
	同僚	17	30.4%
	部下・後輩	25	44.6%

人(10.7%)、不明が4人(7.1%)であった。経験年数では、「15～19年」が最も多く13人(23.2%)、次いで「10～14年」と「20～24年」が各11人(19.6%)、「5～9年」が9人(16.1%)、「0～4年」が5人(8.9%)、「25年以上」が3人(5.4%)、不明が4人(7.1%)であった。調査協力者との関係では、「部下・後輩」が最も多く25人(44.6%)、次いで「同僚」が17人(30.4%)、「上司・先輩」が14人(25.0%)であった。このことから卓越した実践は、組織における階級や上下関係にとらわれない傾向があることがわかる。

調査結果(自由記述)をⅡ-5.の手順にしたがって分析したところ、88個のコード、26個のカテゴリ、8個の上位カテゴリに分類することができた。さらに上位カテゴリを、対象別に4つの領域に分類することができた(表3)。以下では、領域ごとにその内容について述べる。なお、上位カテゴリは【 】、

カテゴリは< >、コードおよびコードに登場する語句は「」で示す。

1) 利用者に関する領域

この領域は、介護福祉士と利用者との実践的な関わりが中心となっており、【利用者の置かれた状況を理解し対応できる】【利用者本位のサービス提供ができる】【コミュニケーション技術を駆使できる】【介護過程の展開につなげることができる】の4個の上位カテゴリから構成される。

①【利用者の置かれた状況を理解し対応できる】

この上位カテゴリは、20個のコード、6個のカテゴリから生成された。

<難渋した場面に適切に対応できる>は、「興奮状態にある利用者」や「暴力行為のみられる人」に対するケアに際し、他の職員では対応がうまくいかない場合であっても、適切にケアできることを表している。施設や事業所において、個別ケアの重要性は理解できるものの、特定の利用者のみに関わると、周囲の利用者から「なぜあの人ばかり」と思われかねない。<周囲に配慮した個別ケアができる>とは、「大勢いる利用者」や「周囲の利用者」にも配慮したうえで、個別ケアを遂行できることを表している。利用者への直接的な介助だけではなく、「食事の雰囲気づくり」をはじめ、「利用者の特性」や「自立に向けた」環境調整ができることを表しているのが<介護の環境調整ができる>である。介護の現場では昼夜を問わず緊急事態が発生する可能性がある。<緊急時に適切な対応ができる>とは、そうした場面に遭遇した際、「異常を素早く察知」し、「医療機関」や「関係機関」に適宜つなげることを表している。介護現場で発生す

る様々なリスクに対し、事前に「リスクを察知」したり、「利用者が混乱しないよう」に予防的に対応できることを表しているのが<危険予知能力が高い>である。<利用者の代弁ができる>は、認知症などにより意思表示が難しい場合であっても、「利用者の立場を理解し、代弁すること」を表している。

②【利用者本位のサービス提供ができる】

この上位カテゴリは、18個のコード、4個のカテゴリから生成された。

介護福祉士はレクリエーションや機能訓練に携わることもあるが、<工夫されたアクティビティを提供できる>は、「脳トレ」を取り入れたり、「特技」を生かすといった、一般的なレクリエーション等に創意工夫を加えることを表している。現場で業務を遂行するにあたり、ともすれば職員本位の業務に陥ることも考えられる。<利用者本位のケアを提供できる>は、「利用者の尊厳」を重視した上で、あくまでも「利用者本位」のケアに徹することを表している。利用者の自立を支援することは重要であるが、一方向からのサービス提供では、利用者にすれば強制されている気持ちになるかもしれない。<利用者に寄り添い自立を支援することができる>は、「利用者と一緒に」という言葉に象徴されるように、利用者の強み(ストレングス)を活用したうえで、自立支援を行うことを表している。<利用者に全人的な理解ができる>は、「認知症の症状だけではなく」あくまでもその人自身を理解することを表している。

③【コミュニケーション技術を駆使できる】

この上位カテゴリは、11個のデータ、2個のカテゴリから生成された。

介護の場面全般を通して、利用者とのコミュニケーションが重要であることは、言を

またない。コミュニケーションの場面において、「認知症の人」に寄り添った内容であったり、「常に利用者に丁寧」であることを心がけていたり、「ケアの根拠に基づいた」内容であることを表しているのが<相手に相応しいコミュニケーションができる>である。さらに、<コミュニケーションを活用し状況を改善できる>は、コミュニケーションを駆使して、利用者の「不安を軽減」させたり、「笑顔を引き出」したり、利用者が「穏やかになる関わりができる」ことを表している。

④【介護過程の展開につなげることができる】

この上位カテゴリは、8個のコード、3個のカテゴリから生成された。

介護現場において介護福祉士に期待されていることの一つは、介護過程が適切に行えることである。<介護過程に精通している>とは、「アセスメントやモニタリング」をはじめ「個別介護計画がしっかり作成できる」ことを表している。介護過程を展開するうえで情報を収集することは起点となり得るが、それは改まった場所だけで行うものではない。「家族」との面会時やデイサービスの「送迎時」など、機会を逃さずに利用者の情報収集に努めていることを表しているのが<様々な場面で情報収集ができる>である。さらに<利用者の日頃の動向をよく観察している>は、「日頃の観察力」が高く「利用者の状態の変化を敏感に察知」できることを表している。

2) 家族に関する領域

この領域は、介護福祉士と利用者の家族との関わりが中心となっており、【家族への対応ができる】から構成される。

①【家族への対応ができる】

この上位カテゴリは、3個のコード、2個

のカテゴリから生成された。

施設・事業所に滞在中の利用者の状態に変化がみられた際に、「冷静な判断」のもと家族へ「状況を報告」することを表しているのが〈家族への連絡が適切にできる〉である。一方、〈家族へ介護方法の指導ができる〉とは、プロの立場としての「助言」など、家族に対する介護指導ができることを表している。

3) チームに関する領域

この領域は、チームにおける介護福祉士に関する内容が中心となっており、【リーダーシップを発揮することができる】【多職種協働によるチームケアができる】の2個の上位カテゴリで構成される。

①【リーダーシップを発揮することができる】

この上位カテゴリは、14個のコード、4個のカテゴリから生成された。

〈メンバーからの信頼が厚い〉は、チームのリーダーとして「メンバー」や「他職種」から「信頼が厚く」、「チームをまとめ」られることを表している。〈率先して行動することができる〉とは、「メンバーが嫌がること」や「介護に抵抗のある人」に対しても、能動的に行動ができることを表している。メンバーが「困っている時」に「表情や顔色を察して」、仕事に配慮ができることを表しているのが〈メンバーに気遣いができる〉である。〈後輩に適切に指導ができる〉は、上司・先輩の立場から「後輩の言葉遣い等を適切に指導」できることを表している。

②【多職種協働によるチームケアができる】

この上位カテゴリは、8個のコード、2個のカテゴリから生成された。

〈多職種と適切に連携ができる〉は、多職種に対し「根拠に基づいた意見」を発言する

ことで「情報交換や連携」を行ったり、「問題解決」に導くことを表している。〈メンバーに情報共有ができる〉は、「統一したケア」に向けメンバーに「情報共有」することを表している。

4) 自身に関する領域

この領域は、実践者自身としての心構えや姿勢が中心となっており、【専門的知識・技術の研鑽に励んでいる】から構成される。

①【専門的知識・技術の研鑽に励んでいる】

この上位カテゴリは、6個のコード、3個のカテゴリから生成された。

〈自己研鑽を怠らない〉は、「資格取得」を目指したり、「研修会に参加」することで、専門職として自己研鑽に励んでいることを表している。〈最新の情報や制度に詳しい〉は、「自主的に最新の福祉用具等」の情報収集に努めたり、「利用者に役立つ制度の手続き」に詳しいことを表している。〈学会で発表ができる〉は、専門職として「自職場の活動内容」を分析し、学会にて発表できることを表している。

3. 上位カテゴリの関係性

生成された上位カテゴリ間の関係性について表したものが図1である。介護福祉士の卓越した実践として、【コミュニケーション技術を駆使できる】ことや【介護過程の展開につなげることができる】といった技術面、また【利用者の置かれた状況を理解し対応できる】という問題解決の側面があげられる。それらは【利用者本位のサービス提供ができる】に集約される。また利用者に対する実践だけではなく、【家族への対応ができる】ことも必要とされる。利用者と家族に対する実践は不

表3 カテゴリー一覧

領域(4)	上位カテゴリ(8)	カテゴリ(26)	コード (文章要約例)	コード数	
利用者	利用者の置かれた状況を理解し対応できる	難渋した場面に適切に対応できる	「興奮状態にある利用者に、適切な対応ができる」「介助が難しい場面でも、単独で対応することができる」「暴力行為のみられる人に、素早く丁寧に、排泄介助を行うことができる」 など	7	
		周囲に配慮した個別ケアができる	「大勢いる利用者に平等に接するように配慮している」「周囲の利用者に配慮した上で、個別対応ができる」「レクリエーションで個別対応をしながら、他の利用者にも配慮できる」 など	4	
		介護の環境調整ができる	「食事の雰囲気づくりに配慮している」「利用者の特性に応じた環境調整を行うことができる」「利用者の自立に向けて環境調整を行うことができる」など	4	
		緊急時に適切な対応ができる	「異常を素早く察知し、適切に救急搬送につなげることができる」「異常を素早く察知し、適切に関係機関につなぐことができる」	2	
		危険予知能力が高い	「経験からリスクを察知し、メンバーに周知することができる」「利用者が混乱しないよう、事前に察知して場面転換することができる」	2	
		利用者の代弁ができる	「利用者の立場を理解し代弁することができる」	1	
	利用者本位のサービス提供ができる	工夫されたアクティビティを提供できる	「脳トレを取り入れた歩行訓練を行うことができる」「特技を生かしたレクリエーションができる」「個別のニーズをくみ取り、アクティビティに反映させることができる」 など	7	
		利用者本位のケアを提供できる	「利用者本位の立場からケアを行うことができる」「利用者の尊厳を重視している」「利用者本位の業務改善を提案し、実施している」 など	6	
		利用者に寄り添い自立を支援することができる	「利用者と一緒に日常生活に活用できる用具を作る」「利用者と一緒に用具を作り実際の生活場面で活用することができる」「利用者に寄り添ったケアを提供できる」	3	
		利用者に全人的な理解ができる	「認知症の症状だけではなく人間的な理解ができる」「利用者に対し人間的な理解ができていく」	2	
	コミュニケーション技術を駆使できる	コミュニケーションを活用し状況を改善できる	「利用者から笑顔を引き出すことができる」「コミュニケーションを用い利用者の不安を軽減できる」「看取りの利用者が穏やかになる関わりができる」 など	7	
		相手に相応しいコミュニケーションができる	「認知症の人に寄り添ったコミュニケーションができる」「ケアの根拠に基づいたコミュニケーションをとることができる」「常に利用者丁寧に丁寧なコミュニケーションをとることができる」 など	4	
		介護過程の展開につなげることができる	様々な場面で情報収集ができる	「家族から利用者の生活歴を収集する」「送迎時に情報収集ができる」「利用者の生活歴を把握しケアに反映させることができる」 など	4
	介護過程に精通している		「アセスメントやモニタリングの能力が高い」「個別介護計画がしっかり作成できる」	2	
	家族	家族への対応ができる	家族への連絡が適切にできる	「家族に適切に状況を報告することができる」「利用者が息を引き取られた直後に、冷静な判断と対応ができる」	2
			家族へ介護方法の指導ができる	「送迎時に予想されるリスクに関する助言ができる」	1
	チーム	リーダーシップを発揮することができる	率先して行動することができる	「メンバーが嫌がることでも率先して行動することができる」「主体的に業務内容を考え、実践できる」「介助に抵抗がある人に率先して関わることができる」など	5
			メンバーに気遣いができる	「職員が仕事で困っている時に気遣いができる」「職員の表情や顔色を察して配慮することができる」 など	4
			メンバーからの信頼が厚い	「メンバーからの信頼が厚く、チームをまとめることができる」「他職種からの信頼が厚い」「職員を仕事に巻き込むことができる」	3
			後輩に適切に指導ができる	「後輩の言葉遣い等を適切に指導することができる」	2
多職種協働によるチームケアができる		多職種と適切に連携ができる	「多職種に対して根拠に基づいた意見を言える」「他部署から意見を求め問題解決ができる」「多職種と情報交換や連携をとることができる」 など	5	
メンバーに情報共有ができる	「チームのメンバーに情報共有ができる」「統一したケアを実現するために工夫している」	3			
自身	専門的知識・技術の研鑽に励んでいる	自己研鑽を怠らない	「資格取得を目指し自己研鑽に励んでいる」「自主的に研修会に参加し、研修内容をフィードバックしている」「新人であるが努力を惜まず成長が速い」	3	
		最新の情報や制度に詳しい	「自主的に最新の福祉用具等の情報収集ができる」「利用者に関与する制度の手続きに詳しい」	2	
		学会で発表ができる	「自職場の活動内容を学会で発表することができる」	1	

可分である。こうした実践はチームで行われることが多く、【多職種協働によるチームケアができる】ことが求められる。それと同時に、チーム内で【リーダーシップを発揮することができる】ことも必要な資質といえる。さらに、実践を支える基盤として、実践者自身が【専門的知識・技術の研鑽に励んでいる】ことは欠かせない要素である。

IV | 考察

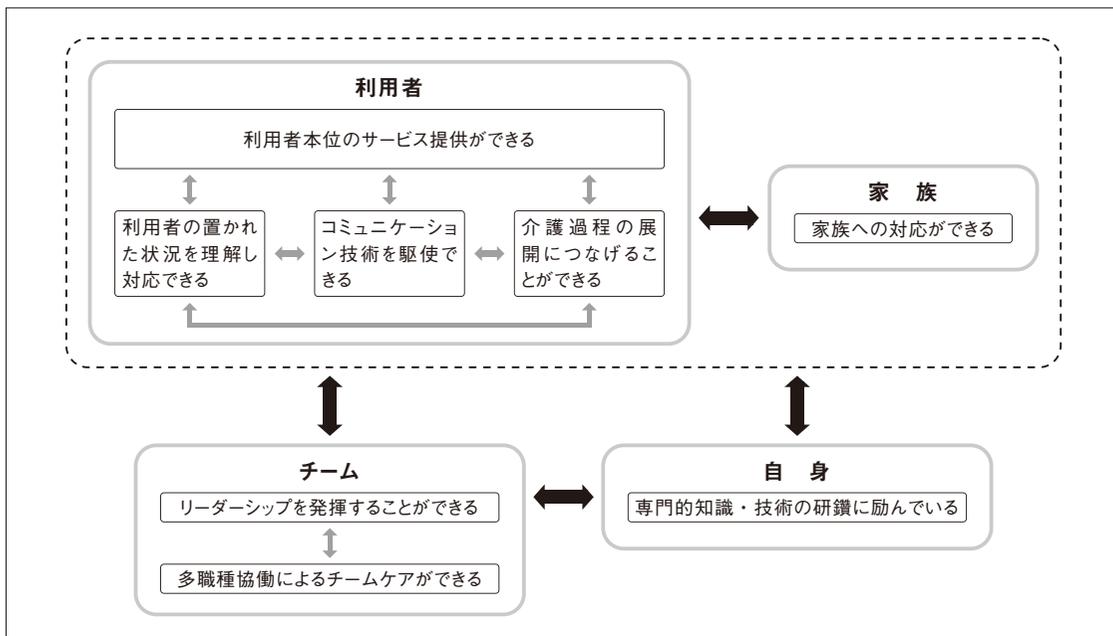
1. 「求められる介護福祉士像」と上位カテゴリの照合

ここでは、本研究で導き出された上位カテゴリと「求められる介護福祉士像」で示された11項目の照合を行いたい。国の示す介護福祉士のあり方との照合を通して、本研究で生成された上位カテゴリの意味内容を検討することが目的である。

「求められる介護福祉士像」の項目と上位

カテゴリを照合したところ、本研究の上位カテゴリは「求められる介護福祉士像」のすべての項目に該当した(図2)。そのなかで、複数の項目と関係しているのが、【利用者の置かれた状況を理解し対応できる】【利用者本位のサービス提供ができる】【コミュニケーション技術を駆使できる】【介護過程の展開につなげることができる】である。これらの上位カテゴリは、利用者に対する実践であるため「高い倫理性の保持」と通底している。特に【利用者の置かれた状況を理解し対応できる】は、「求められる介護福祉士像」の③④⑤とも照合している。当カテゴリには問題解決の要素が含まれるため、総合的な実践力が求められるといえる。【利用者本位のサービス提供ができる】は、本人のニーズへの対応と自立の支援という両方の要素が含まれていることから、「求められる介護福祉士像」の①と⑥に対応していると考えられる。また【コミュニケーション技術を駆使できる】には状

図1 上位カテゴリの関係性



況を改善する要素も含まれていることから、「求められる介護福祉士像」の⑧に加え、③とも関係していると解釈することができる。

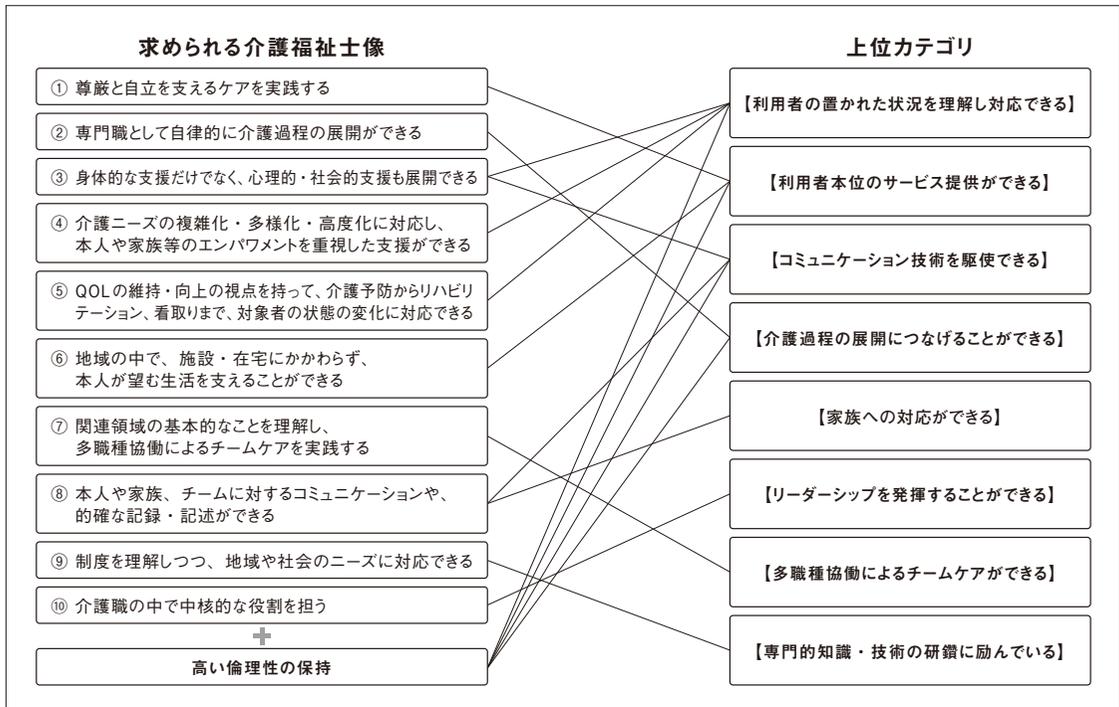
2. 介護福祉士の卓越した実践の特徴

ここまでの結果をふまえ、介護福祉士の卓越した実践の特徴について述べる。第一に、根拠に基づいた実践が行われている点である。介護福祉教育研究会(2016,p.41)は「介護過程の各段階で、介護における専門的知識・技術を活用し、根拠に基づく実践を行うことができる」と、介護過程と根拠(evidence)に基づく実践の関係について述べている。本研究では【介護過程の展開につなげることができる】が生成されたことから、卓越した介護福祉士の実践は介護過程と関連していることを示唆している。加藤(2012)は「介護観察が全ての出発点であり、介護行動の根拠として

の役割の一部を担っている」と、根拠ある実践には介護観察が重要である点に言及している。本研究では「利用者の日頃の動向をよく観察している」が生成されたことから、加藤の見解を支持する形となった。

一方で、根拠に基づく実践の重要性は、利用者へのケアだけではなく、家族や多職種と接する際にも有効とされる。中家(2020)は「専門職として、利用者、家族、他職種に口頭や文章で根拠を示す必要」があると、利用者のみならず、家族への説明や伝達にも根拠が求められる必要性について述べている。また太田(2014)も、介護福祉士の活躍の場が施設から地域に拡大している状況をふまえ、介護福祉士には家族や地域住民に「説明できる力」がより求められると論じている。本研究の【家族への対応ができる】にも「連絡が適切にできる」ことや「介護方法の指導」が含ま

図2 「求められる介護福祉士像」と上位カテゴリの照合



れていることから、根拠に基づく情報提供や介護指導ができることが、卓越した実践につながるものと考えられる。また、【多職種協働によるチームケアができる】には、サービス担当者会議等で「多職種に対して根拠に基づいた意見を言える」が含まれていることから、多職種と意見を交わす際にも根拠を示すことが説得力を高めるために役立つ。以上を通して、利用者へのケアだけではなく、家族や多職種に対しても、根拠に基づく実践が求められていることがわかる。卓越した実践とは、根拠に基づく実践の延長線上にあるものと考えられる。

第二に、問題解決が行われている点である。安(2013,p.124)は「介護福祉士が行う生活支援の援助行為には、ソーシャルワークが常に含まれており、切り離すことはできない」と述べている。ソーシャルワークは、人々がその環境と相互に影響し合う接点に介入する実践といえる。本研究では【利用者の置かれた状況を理解し対応できる】が生成された。この中のカテゴリには、ソーシャルワークが活用されている場面をみることができる。＜介護の環境調整ができる＞では、利用者自身ではなく、利用者の生活環境にアプローチしていることがわかる。また＜緊急時に適切な対応ができる＞では、異常を察知した際の医療リファーマ(送致)や関係機関との速やかなコーディネーションが行われていることがうかがえる。これらのカテゴリからも、介護福祉士は日々の実践の中で利用者本人だけではなく、環境に着目し問題解決に導いていることが理解できる。

一方、＜難渋した場面に適切に対応できる＞や＜コミュニケーションを活用し状況を改善できる＞は、他の職員では対応が難しい場

面でも、前向きに利用者に関わり、膠着した状況や問題を改善に導いている内容といえる。種橋(2017,p.128)は、対応困難な利用者との関わりにおいて「介護職員は、利用者のつらさ、脆弱性を知ることによって利用者を気遣い助ける志向をさらに強めており、利用者を知ることが受容的な関わりにつながる」と論じている。＜難渋した場面に適切に対応できる＞や＜コミュニケーションを活用し状況を改善できる＞では、単に問題となっている現象をとらえるのではなく、利用者の「つらさ」や「脆弱性」といった背景要因を知ること、利用者を受容し、問題を解決に導いていることが推察される。以上の検討から、卓越した実践には、介護現場で生じる問題を解決に導く要素が含まれていると考えられる。

第三に、チームメンバーと良好な関係が築けている点である。利用者に最適な介護サービスを提供するためには、多職種との連携が必要になる。本研究では【多職種協働によるチームケアができる】が生成された。介護福祉士としての「個人能力」を発揮することも重要であるが、それと同時に「組織能力」を活用できることも、卓越した実践の特徴といえるだろう。では多職種も含めたチームの中で、介護福祉士はどのような役割を担うべきであろうか。日本介護福祉士会(2018,p.14)は「多職種連携のなかの介護福祉士の役割の一つは、広い視野で人の暮らしを代弁することではないか」とチームケアにおける介護福祉士の役割について述べている。本研究でも＜利用者の代弁ができる＞が生成された。利用者から近い位置にいるとされる専門職ゆえに、利用者の利益を考えた上で、必要があれば代弁(advocate)することを躊躇してはならない。利用者の代弁を行うには、チームメン

バーの協力が必要な場合も考えられる。卓越した実践を行う介護福祉士は、メンバーに主旨を丁寧に説明するとともに、業務の調整を行うことで、利用者の利益を実現しているものと推察される。こうしたチームケアを円滑に行うにあたり、及川(2021)は「リーダー自身の振り返りや共感できる仲間の存在も必要」とメンバーとの関係性に言及している。また高橋ら(2020)の介護リーダーを対象とした調査では「利用者には過ごしやすいと職員には働きやすい環境を整えることを認識しており、行動としてはケアの質の向上のために職員の主導役や調整役となっていた」と、介護リーダーは職員の働きやすさを視野に入れていることが報告されている。本研究でも【リーダーシップを発揮することができる】の中で<率先して行動することができる>や<メンバーに気遣いができる>が生成されたことから、リーダー的立場の介護福祉士は日頃から職員同士の関わりに配慮していることが理解できる。こうした地道な関わりを積み重ねることで、<メンバーからの信頼が厚い>という評価を得ることにつながる。以上の考察を通して、卓越した実践を行うための基盤として、介護リーダーとメンバーの間には良好な関係が構築されていることが考えられる。

V | おわりに

本研究では、自記式質問用紙に記載された自由記述の質的分析を通して、介護福祉士の卓越した実践の特徴について検討してきた。その結果、26個のカテゴリから成る8個の上位カテゴリ(【利用者の置かれた状況を理解し対応できる】【利用者本位のサービス提供ができる】【コミュニケーション技術を駆使

できる】【介護過程の展開につなげることができる】【家族への対応ができる】【リーダーシップを発揮することができる】【多職種協働によるチームケアができる】【専門的知識・技術の研鑽に励んでいる】)を生成することができた。これらの上位カテゴリと厚生労働省が示す「求められる介護福祉士像」を照合したところ、すべての項目に該当した。さらに、介護福祉士の卓越した実践の特徴として、①根拠に基づいた実践が行われている点、②問題解決が行われている点、③チームメンバーとの良好な関係が築けている点、を見出すことができた。本研究の成果は、介護現場における現任研修や介護福祉士の実践指針を示す上での基礎資料となるのではないかと思われる。

ただし本研究は、A県介護福祉士会のみを調査対象としていること、また調査協力者の所属分布に偏りがみられたことから、調査結果を一般化することは難しい。これらの点については、今後の研究課題としたい。

◎ 注釈

1) 2007年版に示された12項目をふまえ、社会状況や人々の意識の移り変わり、制度改正等を鑑み、次の10項目に整理された。①尊厳と自立を支えるケアを実践する、②専門職として自律的に介護過程の展開ができる、③身体的な支援だけでなく、心理的・社会的支援も展開できる、④介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応し、本人や家族等のエンパワメントを重視した支援ができる、⑤QOLの維持・向上の視点を持って、介護予防からリハビリテーション、看取りまで、対象者の状態の変化に対応できる、⑥地域の中で、施設・在宅にかかわらず、本人が望む生活を支えることができる、⑦関連領域の基

◎ 参考文献

伊藤優子(2018)「求められる介護福祉士像の実現に向けて——新しいカリキュラムの教育内容の考え方」『地域ケアリング』20(5), pp 10-17.

別府千恵(2019)「看護部長が認識する看護師長の卓越した成果と関連するコンピテンシー」『日本医療・病院管理学会誌』56(2), pp 27-35.

谷口純平・白鳥さつき・大石ふみ子・室谷健太(2017)「救急病棟に勤務する卓越した看護師のせん妄発症予防の看護の特徴」『愛知医科大学看護学部紀要』(16), pp 39-47.

齋藤直美(2015)「高齢者の退院調整における熟練看護師の卓越した実践」『神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録』(40), pp 186-191.

上田貴子・亀岡智美・舟島なをみ・野本百合子(2005)「病院に就業する看護師が展開する卓越した看護に関する研究」『看護教育学研究』14(1), pp 37-50.

岩井恵子(2006)「介護福祉士のあり方と今後の展望」『発達人間学論叢』(10), pp 35-49.

本間美幸・八巻貴穂・佐藤郁子(2010)「介護福祉士の専門性に関する研究——北海道介護福祉士会会員の意識調査結果から(第1報)」『人間福祉研究』(13), pp 131-143.

大村光代・今泉雅博・後藤卓郎・吉田節子(2010)「本学卒業生の職場経験から見える介護福祉士の専門性の在り方——設立10周年における卒業生へのアンケート調査より」『愛知新城大谷大学研究紀要』(7), pp 39-48.

安瓊伊(2013)「実践における介護福祉士の専門性の明確化に向けた研究」日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科2013年度博士学位論文.

吉田綾子・杉澤秀博(2012)「特別養護老人ホームの介護職員の仕事継続プロセス——5年以上継続している介護福祉士の場合」『老年学雑誌』(3), pp 67-81.

本的なことを理解し、多職種協働によるチームケアを実践する、⑧本人や家族、チームに対するコミュニケーションや、的確な記録・記述ができる、⑨制度を理解しつつ、地域や社会のニーズに対応できる、⑩介護職の中で中核的な役割を担う、である。これら10項目に加え、2007年版では他の項目と並列で扱われていた「高い倫理性の保持」が、2017年版では全体に共通する項目としてプラスする形で位置づけられている。

2) 公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会の「介護福祉士の統計データ」を参照。

(<http://kaiyokyo.net/data/index.html>, 2021.6.1)

柘崎京子・楠永敏恵・鈴木聖子(2018)「経験5年以上の介護福祉士における認知症ケアの判断内容」『帝京科学大学紀要』14, pp 95-102.

武田啓子・久世淳子・藤原秀子・ほか(2018)「介護職員の介護実践に関する研究——介護福祉士養成課程を卒業した介護福祉士の勤務年数による比較」『厚生指標』65(15), pp 24-29.

高橋由紀・今野多美子・下山美由紀・大友芳恵(2020)「高齢者施設に勤務する介護リーダーに求められる役割認識と役割行動の現状」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』16(1), pp 35-41.

介護福祉教育研究会編(2016)『楽しく学ぶ介護過程(改訂第3版)』久美.

加藤友野(2012)「介護福祉士の専門性に関する研究——求められる介護福祉士像から見る現状と課題」『総合福祉科学研究』(3), pp 105-118.

中家洋子(2020)「介護福祉士養成課程における新カリキュラムに向けた介護過程の評価——現状の評価教育からの考察」『大阪人間科学大学紀要』(19), pp 87-95.

太田貞司(2014)「介護職チームのリーダーとしての役割」『地域ケアリング』16(11), pp 51-54.

種橋征子(2017)『介護現場における「ケア」とは何か』ミネルヴァ書房.

日本介護福祉士会編(2018)『介護福祉士がすすめる多職種連携』中央法規出版.

及川ゆりこ(2021)「介護福祉士の専門性を高めるために」『ふれあいケア』27(4)(通巻増刊), pp 28-31.

安瓊伊(2014)「介護福祉士の専門性の構成要素の抽出——介護福祉士養成施設の介護教員の自由記述の内容分析に基づいて」『老年社会科学』35(4), pp 419-428.